

単語の語構成について

一人を表す名詞を中心に

譚 利群

On Word Formation

TAN Li-qun

Abstract: The word-formation is an important aspect of the word itself and one of the important research fields in supporting the lexical teaching. By analyzing the lexical structures of personal names, this paper intends to explore the general features of the word-formation in Japanese words and prove the relationship between the word-formation and etymology, and between the word-formation and semantic meaning so as to provide valuable suggestions in language applications.

Key words: affix, base, word-formation, semantic features

1. はじめに

1.1 語彙は文法と違って、規則性の低いばらばらな存在だと思われている。それで、日本語教育の立場から単語の意味や語構成などの側面を研究する人が少なく、当然文法ほど多くの研究成果がみられない。日本語教育の現場では、明らかに単語の指導が足りない現状であり、単語の学習が学生の重い負担となっている。しかし、単語は言語の基本的材料であり、単語一つ一つどこまで理解し、使用できるか、その人の言語能力を決めるポイントの一つである。

単語には語彙的意味と文法的意味の側面がある。文法的な意味は語彙的な意味に支えられて、語彙的な意味は文法的な意味を正確に理解する前提となっている。単語にはまた語構成の側面があり、それも単語の重要な特徴の一つとなっている。その研究は単語の語構成的特徴を認識することに意味があるだけでなく、単語の意味、機能、語形および単語の語感などの理解にも役に立つことである。

確かに、単語の文法的意味と語彙的意味がともに生きているものに対して単語の語構成はすでに過去のものであり、その原理はただ単語を作る最初で役に立つもので、学習者としては、一々と究明する必要はない。ところが、単語の語構成は単語自身の重要な特徴の一つであるし、それを手がかりにして、単語の音声的、意味的、文法的な特徴を窺うことができる。がゆえに、その研究は語彙の研究にかけてはならない部分である。

1.2 人間は社会生活、活動を営む主体であって、人間を表す言葉も何よりも豊かなものである。それはどの言語でも同じだろうと思う。1964年出版された日本語の『分類語彙表』には、「人間活動の主体」という部分に、次のようにいろいろな立場から見た人名詞が集められて、分類されている。

例：1.200 われ、なれ、かれ、だれ、1.202 人間、1.203 神仏、精霊、1.204 男女、1.205 老少、1.210 家族、1.211 夫婦、1.212 親、先祖、1.220 相手、仲間、1.230 人種、民族、1.233 社会階層、1.234 人物、1.241 専門的、技術的職業、1.244 相対的地位

各種類の中には、ある属性や性質を持っている人間、ある状態に置かれた人間、ある動作をしている人間など、さまざまな意味特徴を持つひと名詞が挙げられている。

人名詞は豊かな意味特徴を示しているだけでなく、語構成的にも豊かなタイプが見られる。しかし、人名詞の意味特徴は必ずしも自明のものではない。人名詞を語構成の視点から眺めて、さらにそれを通じて、日本語語彙における名詞の語構成と語種、語構成と意味のつながりを観察することは本研究の目的である。

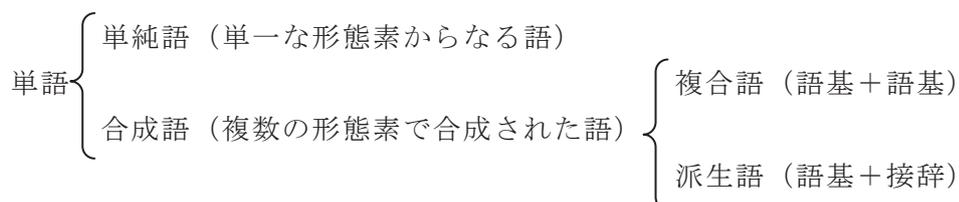
1.3 本研究は次のような前提と立場に踏まえて進めていきたい。一言人名詞といっても、意味的に次元の違うものがある。「妻」、「古人」、「かたき」のような類は「ひと」という意味要素がむしろその単語の中心的意味となっているが、それに対して、「意地悪」、「うそつき」、「一文無し」などはことをあらわす意味が基本的で、そうする人、そうである人を表すのは二次的である。この種類のものもここで人名詞の一部として扱う。

語構成について——単純語なのか、合成語なのかの判断は、通時的視点をどこまで入れるかによって、結果が大きく違ってくる。現代日本語の中では、「むすめ」、「やもめ」、「おとめ」などが疑問なく単純語だと思われるが、歴史的に見れば、中の「め」は語構成要素として引き出すことが可能である。議論となるところがあるだろうが、ここで現代日本語という共時的な視点しか取らない立場である。

1.4 日本語の語構成と意味に関する研究は時代を貫く有力な論説がある。たとえば、松下の「原辞論」（昭和49年）、阪倉の語構成論（1957年）、森岡の「形態素論」（1984年）など。本研究では、人名詞という語彙体系を対象として、前述した論説を踏まえながら、検討を進めていきたい。分析の視点と観点は宮島（1997）と湯本（1977）から多くの示唆を得ている。

2. 人名詞の語構成的特徴

2.1 日本語における人名詞は他の意味分野の語彙と同じように豊かな語構成形式を示している。



ここに出ている「**形態素**」（morpheme）、「**語基**」（base）、「**接辞**」（affix）は次のような意味で用いられている。

形態素は意味を持つ最小単位であり、二つ以上あるいは単独で語を構成することができる。形態素の中には単語の語彙的意味を担って、語の基幹をなす主な部分——つまり語基と、自立することがなく他の語基に付属して単語をなす部分——接辞がある。語基と接辞はともに語を構成する形態素であって、語を構成する際、違う機能をするものである。

接辞によって作られた単語は**派生語**（derivation）と呼ぶ。接辞は語基の前におく**接頭辞**（prefix）と、語基の後におく**接尾辞**（suffix）に分けられる。

単語の語構成を記述する際、次のような記号を利用して、違う種類の要素を表すことにする。

名詞的要素=N 動詞的要素=V 形容詞的要素=A 副詞的要素=Ad

数詞的要素=Q 接頭辞=P 接尾辞=S

2.2 まず和語における人名詞の語構成パターンを見ていこう。

①単純語

ひと もの やつ おとこ むすめ おっと むこ つま よめ さむらい かしら ちんぴら
ら いもうと おきな ぬし あだ やくざ かたき おっちょこちょい ちち はは たわや
め わらべ おとめ みかど めい

単純語の中には以上のような最初から名詞の形で生まれたものと、次のような転成という手続きを通じて動詞などから得られたものがある。

使い かかり すり つれ なじみ たより 雇い かかえ

②合成語

②-1 複合語 複合語には構成された関係に基づき、次のいくつかの種類に分けることができる。

A 並列関係でできたもの N+N ちちはは つまこ おやこ

V+V 出戻り 追い脱ぎ

B 規定関係でできたもの N+N 母親 兄嫁 末っ子 旅人 駄々っ子

A+N いとし子 若手 若者 いたずら子

A+V 幼なじみ

N+V 道連れ 身寄り 顔ぶれ

Ad+N またいところ

Q+N 一人子 双子

V+N 釣り人 はたらきもの 狩人 もらい子

C 動詞的統語関係でできたもの

N+V 金貸し(金を貸す)、跡継ぎ(跡を継ぐ)、世帯もち(世帯を持つ)、物知り(物を知る)、物売り(物を売る)、船乗り(船に乗る)、牛飼い(牛を飼う)、猿回し(猿を回す)、絵描き(絵を描く)、靴磨き(靴を磨く)、酒飲み(酒を飲む)、うそつき(うそをつく)、注文聞き(注文を聞く)、笛吹き(笛を吹く)

D 形容詞的統語関係でできたもの

N+A 宿無し(宿がない)、人よし(人がよい)、意地悪(意地が悪い)

Q+A 一文無し(一文もない)

E 複合動詞から転じたもの

連れ合い、とりまき、近づき、知り合い、いいなづけ、ごろつき、でしゃばり、酔っ払い

F 複合形容詞から転じたもの

仲良し

G 単語の機能形式や文法要素などが語形化されたもの

はらから、ひとでなし、いい子、男の子、家の子

H 二重以上の構成関係でできたもの

N+V+N 箱入り娘 茶飲み友達 乳のみ子

N+A+N 親なし子 ててなし子

②-2 派生語

A 接頭辞によるもの

お～ お袋

片～ 片親

継～ 継母、継父

B 接尾辞によるもの

～手 (て) 買い手、送り手、借り手、乗り手、担い手、聞き手、釣手、やり手、雇い手、
攻め手、引き取り手、決め手、話し手

～屋 タバコ屋、餅屋、唐物屋、宿屋、雑誌や、本屋、料理屋、酒屋、郵便屋、政治屋、殺
し屋、洗濯屋、寒がり屋、呑気屋、便利屋

～さん 新聞屋さん、奥さん

C 接頭辞と接尾辞両方によるもの

お巡りさん、お上りさん、お座敷さん、お医者さん

以上の分類から、和語における人名詞の語構成的特徴がいくつか見られる。

(1) 人名詞の中には単語全体あるいは部分的な語構成要素は動詞、形容詞から転じたもの
かなり多い。転成という語形成の手段が単語の形成において、重大な役割を果たしているのは、
見逃してならないことである。単純語にも複合語にも、派生語にいたって転成の面影が見られる。
したがって、単純語と複合語の中で、みな転成語を一つの語形成の種類として取り立てたのであ
る。

しかし、以上の分類でわかるように転成という語形成方式が他の語形成方式と混在している場
合が多い。「出戻り」は「並列関係でできたもの」にいたたに対して、「知り合い」は「複合動詞
から転じたもの」にしている。ここで基づく大事な基準は転成の手続き、つまり動詞の名詞化と
複合などの他の手続きとどちらが最終的に行われたかのことである。明らかに「出戻り」の場合
「出る」と「戻る」は先に名詞化されて、そして「で」+「戻り」、つまり「居体言」¹+「居体
言」でできたものである。それに対して、「知り合い」は複合動詞「知り合う」全体から名詞化
されたものであって、「知り」という部分はやはり「動詞連用形」を保っているわけである。最
最終的な手続きは転成としか言えないのである。それと同じ理由で、「金貸し」や「お巡りさん」
の中の動詞の名詞化は最終的な手続きではないから、他の語形成のパターンに入るのも納得でき
ることである。したがって、同じ複合語といっても、語形成方式が多様であることに注意してもら
いたい。

(2) 複合語の中のGの類は単語の語構成のパターンとして典型的なものとは言えないが、一つ
の種類として語彙体系の中に確かに存在している。あたらしい単語を形成する際、文法的要素や
単語の機能形式を排除するのが一般的であるが、「はらから」の「から」、「家の子」の「の」、「い
い子」の「いい」など、何らかの理由で複合語の中に残っている。その現象は人名詞の場合だけ
でなく、他の意味分野を表す語彙の中にも見られる。「木の葉」、「きのこ」、「絵の具」などが似
ている例である。

(3) Cの「動詞的統語関係でできたもの」も注目される類である。そこに現れるほとんどの
ものにははっきりした「他動詞とそれにかかわる格」の統語関係が見られる。単語全体が表して
いる意味も共通した傾向が示されている。一種の「こと、あるいは仕事」を表すと同時に、「そ
のことをする人」もあらわしている。「炭焼き」、「子守」、「歌詠み」、「注文聞き」、「猿まわし」

¹ 阪倉 (1957) による。

などみんな典型的な例である。ただし、この類の言葉は古い層のものが多くて、今では、使わなくなったり、「歌詠み」は「歌人」、「月給取り」は「サラリーマン」のように漢語や外来語が取って代わっていたりすることが多い。

(4) 派生語の場合は三つの種類に分けるのも、今までと違う分け方である。ここで派生語のC「接頭辞と接尾辞両方によるもの」を一つのパターンとして取り立てたのである。人の目によくはいるのは「お袋」のような「接頭辞」によるもの、「タバコ屋」のような「接尾辞」によるものであるが、「おまわりさん」、「お医者さん」のような接頭辞と接尾辞両方とも必要となり、一方欠けたら、完璧な単語として成り立たないものが見落とされることが多い。したがって、日本語教育の現場でよく「お客が来た」、「医者さんに見てもらった」のような間違いをたびたび見る。

2.3次では、漢語における人名詞の語構成パターンを検討してみよう。

漢語の語構成となると、問題はもっと複雑になってくる。周知のごとく漢字漢語は中国から輸入されたものが多いが、語構成的に中国語と違う特徴が見られる。中国語に使われる漢字は複雑な音節構造や音節アクセントに支えられて、基本的に単語としての資格を持っている。しかし、日本語に入った漢字は「客」、「鉄」、「茶」、「気」、「菌」、「券」のような独自で単語として使えるものがかなり少ない。多くの場合、二字あるいは二字以上の漢字を組み合わさって、初めて単語としての資格が確保されるのである。中日両国の言語では、同じ漢字を使っているにもかかわらず、自立性において、差が見られる。漢字は基本的に表意文字である以上、日本語においても、まったく意味を意識せず使うのはありえないことであるが、自立性が落ちているだけに意味もぼやけてしまうのも当然の結果だろう。

森岡(1984)に指摘されたとおり、漢字は日本語形態素として安定しているものから、不安定なものまで、安定の度合いが大きく違っている。森岡は漢字の安定度合いを根拠にして、漢字を五つの層に分けている。

- a. 音訓両用の漢字 花、夏、荷、考、減
- b. 字音専用で自立する一字漢字 気、客、芸、缶、刑、紺、菌
- c. 派生語基を作る字音専用の漢字 坊(さん)、貴(さま)、(ご)飯、
托(す)、奥(さん)
- d. 熟語の要素としてのみ用いる字音専用の漢字 個、倫、協、債
- e. 日本語の形態素としての資格のない漢字 麒、麟、挨、拶、芭、蕉

裏でその安定の度合いを支えているのは、結局日本人の漢字への意味認識である。認識が深ければ深いほど、その漢字の形態素としての安定度合いが高いということである。aの類は訓読みに支えられて安定している漢字形態素となる。bは自立の単語として使われるものだから、当然意味も明知されるものである。しかし、すでに話したことであるが、この種類は一般的なものではなくて、量的にかなり限られているのである。cのものはもっと数の少ないもので、しかも派生された単語はもう単純な漢語ではなくなり、一種の漢和(あるいは和漢)混種語となっている。dの自立性のない字音専用の漢字は意味がややぼやけて、eは完全に独立の意味を持たない漢字である。

しかし、漢語の語構成を考える場合は一つ忘れてはいけないことがあるが、意味が明知されている漢字でも、自立の単語として使える字音語でも、二字漢語の要素となると、語構成的に和語の複合語と性質の違うものとなってくるのである。「夏服」、「夏日」のなかの「なつ」は、独立の単語として使えるのに対して、「初夏」、「盛夏」となると、「か」はその単語としての自立性を失

っている。つまり、自立性のない二つの語構成要素が寄りかかっている。そのことで、二字漢語の語構成を考える場合、語基と接辞の区別はしにくいのである。

①単純語

客、師、王、役、僧

②合成語

②-1 複合語

A 並列関係でできたもの

N+N 男女、主客、夫婦、妻子、賓客、官民、姉妹、兄弟、父母、弟子、将兵、士官

V+V 書記、捕虜、俘虜、教授、探偵、看守、巡查

A+A 故旧、貴賤、平俗、長老、長幼

B 規定関係でできたもの

N+N 他人、国賓、義父、隣人、仙人、男性、女性、別人、恩人、恩師、婦人、俳人、女医、社員、店員、船客、番人、詩人、文人、画家、力士、病人、船長、機長、医者、商人、法師、漁師、漁夫、芸者、芸妓、娼婦、山賊、海賊、馬賊、軍人、武官、先輩、同輩、後輩、長男、次男、長女、次女

A+N 淑女、美人、美男、美女、巨人、小人、壯者、青年、悪童、幼児、新郎、新婦、良妻、悪妻、慈母、慈父、嚴父、主賓、重役、大敵、黒人、白人、難民、珍客、凡人、名人、貴人、巧者、巨匠、弱者、強者、名医、名優、冗員、巨頭、奇人、怪漢、変人、勇者、勇将、名将、俗人、愚生、掘妻

N+V 女流

Q+N 万人、両親、兩人

V+N 成人、妊婦、産婦、亡父、継父、愛児、愛人、知人、来客、来賓、住民、流民、勝者、敗者、覇者、講師、読者、教師、学生、信者、戦士、犯人、論者、旅人、作家、作者、記者

C 動詞的統語関係でできたもの

V+N 知己、有志、出家、司令、司会、当番

D 修飾関係でできたもの

A+V 旧知、旧識、蜜偵、強盗、古参、蜜使、特使、急使

Ad+V 同行、先達、先覚、被告

②-2 派生語

A 接頭辞によるもの

前～ 前首相、前社長

非～ 非戦闘員、非関係者

美～ 美男子、美少年

B 接尾辞によるもの

～人（にん） 看護人、支配人、弁護人、料理人、受け取り人、請負人、使用人、犯罪人、雇い人、辛抱人、貧乏人

～人（じん） アラビア人、ユダヤ人、宇宙人、外国人、文化人、知識人、映画人、原始人、自然人、野蛮人、有名人、未亡人

～者（しゃ） 為政者、教育者、経営者、消費者、喫煙者、保険者、支持者、調停者、指揮者、旅行者、出演者、受験者、出身者、加害者、創業者、目撃者、来店者、戦死者、

被害者、採用者

～家(か) 活動家、社交家、登山家、実践家、夢想家、勉強家、浪費家、読書家、発明家、教育家、外交家、法律家、小説家、写真家、神経家、情熱家、老練家、健啖家、大食家、愛妻家、迷信家

よく使われる、人を表す接尾辞には、また「～師」、「～手」、「～士」、「～員」、「官」、「～長」、「～婦」、「～児」、「～漢」などがある。ここでいちいちと例を挙げることをしない。

2.4 漢語の語構成は明らかに和語のそれと違う特徴が見られる。まず、同じ「人」(じん)、「人」(にん)、「者」(じゃ)などの人を表す漢字でも、二字漢語と三字漢語の中で違う扱い方をしている。二字漢語の場合、みな自立性のない語基と見ているが、三字漢語の場合、接尾辞にしている。その分類方法は阪倉(1986)と水野(1987)の指摘から多く示唆を得ている。

二字漢語と三字漢語の違いについて、阪倉は次のような指摘がある。「独習法」と「独習書」のような場合、「独習」と「法」、「独習」と「書」というように分解することができる。なぜなら、これらの「法」と「書」は「方法」や「読書」のような語を構成する場合の「法」と「書」とは語構成上の次元が異なると考えているからである。即ち、前者の場合、「独習」という安定した構造の上にさらに結びついて、別の単位を構成するのであるが、後者は、結びつく相手の「方」も「読」もそれだけでは用いられることのないものである。つまり、「読書」の「書」と「独習書」の「書」とは、語構成上の次元が異なることを強調している。

水野は漢語の接辞と語基の捉え方について、「静的に捉える見方」と「動的に捉える見方」があると指摘し、動的な見方を提唱している。

静的な見方では、接辞と語基が語を構成する形態の下位分類ということになり、一つ一つの形態が接辞と語基のどちらかに分類される。例えば、「積極性」、「近代化」の「性」と「化」は「性格」、「化学」などにおいて接辞とは考えられないため、語基に分類されることになる。

それに対して、動的見方では、語基は形態の下位分類ではなく、語構成のそれぞれの段階で基幹をなす要素であると考えている。語基をこのように捉えることによって、「積極性」、「近代化」の「性」と「化」は、このように用いられる限りにおいて、接辞だと考えられる。接辞の範囲はこのように柔軟に考えるべきだと主張している。

二者の観察から二つのヒントが得られる。一つは二字漢語と三字漢語の語構の次元が異なるので、同じ形態、同じ意味の漢字でも、異なる語構成の次元において、語構成の機能も異なってくるということである。

もう一つは、漢字の語構成機能を観察する場合、語基なのか、接辞なのか、漢字の形態で静的に判断するのではなく、漢字のおかれた環境を変動的な目で観察することが必要だということである。

このような捉え方で見ていくと、漢語的接辞が和語のそれより量的にずっと多くなっていく。その理由で、漢語的接辞による人名詞の量も和語より多いというわけである。

2.5 外来語の語構成パターンはどうなっているだろう。

外来語と漢語は源から言えばみな外国からのものである。しかし、漢語はすっかり日本語の中に溶け込んで、和語に負けないぐらい語彙量が多くて、日本語のさまざまな位相に分布している。それに対して外来語は量的に少なく、受け入れ方も漢語と大きく異なっている。それは語構成の側面から見ることができる。

①単純語

マスター、バイヤー、メーカー、ブローカー、ポーター、メッセンジャー、ピッチャー、キャッチャー、プレーヤー、バッター、ランナー、フラッパー、メンバー、アナウンサー、プロデューサー、ボクサー、レスラー、デザイナー、マネージャー、オブザーバー、リーダー、コーチャー、エンゼルの、タイピスト、ジャーナリスト、フェミニスト、エゴイスト、ピアニスト、チューター、レナー、セーラー、スポンサー、アジテーター、コンビ、バッテリー、インテリゲンチャー、エキスパート、アマチュア、パトロン、パイロット、ボーイ、ガイド、ベテラン、ホープ、ピエロ、スパイ、ボス、エキストラ、レフェリー、オルグ、コック、マトロス、ファン

②合成語

②-1 複合語

B 規定関係でできたもの

N+N ガールフレンド、カウボーイ

A+N ダークホース、ニューフェイス

V+N ピンチヒッター

以上から見てきたように、外来語の語構成は和語と漢語ほど複雑なものではない。実はそのもととなる英語の語構成を見れば、上の単純語の多くは-er、-istなどの接辞による派生語が多い。日本語にはめ込んだこれらの外来語は接辞の部分が意識されず、完全に前の部分と分解できない一要素として受け取られたのである。

②-1の複合語の場合は一応要素にわけることができるが、ピンチヒッターのように分けにくいものもあるし、サラリーマンの「-マン」の部分は接辞的存在なのか、分析できない部分なのか、いいにくいものもある。「証券マン」「銀行マン」などから見て、かなりの程度で接辞化されていることがわかる。

3. 語構成と意味

3.1 意味や語感の面から観察すれば、人を表す漢語、和語、外来語が異なる特徴を見せている。

まず、家族関係や親族関係を表す言葉はほとんど大和言葉——和語一色である。単純語という語構成形式が多数を占めている。そして職業や仕事に関する言葉の場合は、漢語が主役を担っているが、和語にもかなりの語彙量が存在している。そういう意味的分布からも、和語は日常的、漢語は正式的という特徴が窺える。外来語の語彙量はそんなに多くないが、時代の息吹が強く感じられる。回し者—間諜—スパイ、物売り—商人—セールスマン、船乗り—船員—セーラーなどに示されるように、意味的に似ているものでも、微妙にニュアンスや語感が異なっている。

職業や仕事に関する、またはなんらかの役に当たる意を表す和語の言葉は語構成的に一つ特徴がある。つまり、絵を描く—絵描き、骨を接ぐ—骨接ぎ、牛を飼う—牛飼いのように、何らかのことを表す連語構造から転じたものが多い。動詞の部分は後部要素として造語量が高くて、接辞化されたものも少なくない。例えば、

「～持ち」—世帯持ち、子持ち、太鼓持ち、金持ち、物持ち、太刀持ち、旗持ち、家持、山持ち、提灯持ち。

「～づかい」—人形づかい、手品づかい、猿づかい、蛇づかい

「～とり」—按摩とり、音頭とり、かぎとり、舵取り、機嫌取り、草取り、鯨取り、菓取り、口取り、国取り、鍬取り、ゲーム取り

「～づくり」—物作り、押し手作り、金作り、土器作り、菊作り、蔵作り、酒作り、据物作り、

酢作り、田作り、橋造り、鏡作り、車作り、太刀作り、玉造、罪作り、花作り、文作り、弓作り

3.2 「～持ち」、「～づかい」、「～とり」、「～づくり」など、造語量がかなり高いものである。しかし、上から見たとおり、中には古い層のものが多くて、現代社会生活ではあまり使われていない。漢語輸入の影響なのか、音節数の関係なのか、何らかの理由で、このような造語法はすでに行き詰まった状態になっている。その代わりに漢語、あるいは漢語接辞によるものが現代日本語の中で活躍している。意味の面から見ても漢語系のものがかなり広い面にまたがっている。「ある性質、属性をもつ人」、「ある職業や仕事をする人」、「ある役に当たる人」「ある立場に立つ人」、「一時的動作をする/している/した人」など、さまざまな視点から見た人間があらわせる。それだけでなく「～者」のような造語能力が生きていて、臨時的な動作者を表す語を随時に作れる接辞もある。しかも、複雑なテンス的意味要素も文脈の中から感じられる。

入場者は長く並んで、入場の時間を待っている→これからする動作→する。

歩行者が多いですね。→進行中の動作→している。

事件の目撃者は三人いるそうです。→過去の動作→した。

以上のような利点で、漢語的接辞による人名詞は量的に膨大で、現代日本語中で重要な役割を果たしている。

3.3 全般的に見れば、外来語の語構成の特徴は漢語や和語と比べると非分析的である。宮島の言い方にすれば「総合的」²ということである。即ち、単語丸ごと英語などの言語から取り入れたものが多い。意味的分布も大体西洋文化と密接にかかわったスポーツ、芸術、思想などの分野に集中している。

4. 終わりに

以上で見てきたように日本語における人名詞は豊かな語構成形式がある。語種ごとにその語構成はまた違う特徴が見られる。単語の形成方式は単語の造語力とつながっていて、語種別に人名詞の量的分布に影響を与えている。語種別に意味の分布から、時代発展の足跡が感じられる。人名詞の意味特徴などこれから続いて研究する課題となっている。

参考文献

- 松下 大三郎 昭和 49 『改選標準日本文法』 勉誠社
 国立国語研究所 1964 『分類語彙表』 大日本図書
 明星学園、国語部 1969 『につぼんご7 漢字』 むぎ書房
 国立国語研究所 1972 『国立国語研究所報告 42 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)』 秀英出版
 野村 雅昭 1974 「三字漢語の構造」国立国語研究所『電子計算機による国語研究Ⅵ』 秀英出版
 金田一 春彦 1976 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
 野村 雅昭 1977 「造語法」『岩波講座 日本語9 語彙と意味』 岩波書店
 ゆもと しょうなん 1977 「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大論集』 27

² 宮島『語彙論研究』「語彙の体系」29ページによる。

- 国立国語研究所 1978 「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告 54 電子計算機による国語研究IX 6』 秀英出版
- 玉村 文郎 1981 「和語のはたらき」『言語生活』 359
- 林 四郎 1982 「臨時一語の構造」『国語学』 131 b
- 日本語教育学会 1982 『日本語教育辞典』 大修館書店
- 言語学研究会 1983 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論』 むぎ書房
- 森岡 健二 1984 「形態素論—語基の分類—」『上智大学国文学科紀要』 1
- 奥田 靖雄 1984 「語彙的な意味のあり方」『ことばの研究序説』 むぎ書房
- 国立国語研究所 昭和 59 『日本語教育指導参考書 12 語彙の研究と教育』
- 杉山 博文 1986 「一者一家」『日本語学』 3 明治書院
- 阪倉 篤義 1986 「接辞とは」『日本語学』 3 明治書院
- 原 邦彦 1986 「お— おん— ご— (御)」『日本語学』 3 明治書院
- 水野 義道 1987 「漢字形接辞の機能」『日本語学』 6—2 明治書院
- 大石 強 1988 『現代の日本語学シリーズ 形態論』 開拓社
- 金田一 春彦 1988 『学研国語大辞典 第二版』 学習研究社
- 池田 弥三郎
- 国際交流基金 日本語国際センター 1988 『大辞林』 三省堂
- 玉村 文郎 1988 「複合語の意味」『日本語学』 7—5
- 野村 雅昭 1988 「漢語の造語力」『漢字講座 1 漢語とは』 明治書院
- 金田一 京助 1989 『新明解 国語辞典 四』 三省堂
- 森田 良行, 村木 新次郎, 相澤 正夫 1989 『ケーススタディ 日本語の語彙』 桜楓社
- 早津 恵美子 1989 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」『日本語学』 9—5 明治書院
- 角田 田作 1991 『世界の言語と日本語』 くろしお
- 仁田 義雄 1991 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお
- 村木 新次郎 1991 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
- 影山 太郎 1993 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 高橋 太郎 1994 『動詞の研究 動詞の動詞らしさの発展と消失』 むぎ書房
- 宮島 達夫 1994 「無意味形態素」『語彙論研究』 むぎ書房
- 宮島 達夫 1994 「語彙の体系」『語彙論研究』 むぎ書房
- 宮島 達夫 1997 「ひと名詞の意味とアスペクト, テンス」—『日本語文法 体系と方法』 ひつじ書房

(平成 21 年 3 月 31 日受理)